

何か不思議なものが うごめいている…

ペルシャの伝説 シャネゼル(頭に櫛をのせて): ウプバ(ヤツガシラのイタリア語)という既婚の女性がいた。ある日、ウプバが鏡の前で髪を梳かしていると、前触れもなく突然義理の父親が姿を現した。驚いたウプバは、頭に櫛をつけたまま一羽の鳥に姿を変えてしまった。

マリーノ、2000年2月23日、水曜日

新作オペラ:こここのところ数週間かけて最初のタブローの構想を練って、曲作りをしてきた。(原稿の最初のページの日付は、2000年1月16日になっている。) 今日からは、じっくりと念入りに書き始めたい。一人芝居のプロローグ構成。実と虚が半々の国、アラビアにある塔に、一人の老人が立っている。ここで設定された国は、私の『6つのアラビアの歌、1977年』が原点になっている。(鳥に夢中になり過ぎた老人が、ついっかりと手荒く扱ってしまい、一握りの羽をむしり取ってしまった後)、飛び去って行ってしまった黄金色のヤツガシラが、再び姿を現すのを老人はじっと見守っている。塔で無益な待ちぼうけを続けるうちに、精も根も尽き果てた老人は落ち込んでしまい、飛んで行ってしまったルプバ(訳注:ヤツガシラのイタリア語であるウプバに冠詞をつけた読み方)はもう二度と戻ってこないのではないかと感じてしまう。悲嘆にくれて自分の死をも予感する老人は、この架空の鳥を探すために3人の息子をそれぞれ異なる方角へ送り出したことを語る。このプロローグには、すでに完璧な解説が盛り込まれている。従って、後に起きる出来事については七面倒くさい説明をせずとも、プロローグの結末からストーリー全体の未来像が予測できる…

2000年2月24日、木曜日

老人の悲嘆にくれる様子や死への恐怖を音楽が表す。曲はベーシックなテンポで静かに流れ、主題に合わせて変化させつつ異なる音色で表現する。豊かな長短の二度音程の一連の曲の流れの中で、広がったり凝縮したりする厚みのあるポリフォニーになっている。昨日は、ここ何週間かまでまとってきたものを批判的に見ながらもう一度ピアノで最初から通して弾いて、精査してみた。——変わった曲だ。ここで発見したものの中から、より大事な、今後さらに発展させていく予定のものを選び出す。おそらく、それら一つ一つが自ら重要な構成要素に成熟していくだろう。今のところは、原形で確立されているだけだが。二人の邪悪な兄たちが最初に舞台上に登場する2番目のタブローでは、この部分の作業はおそらく多かれ少なかれ手づかすのままになるだろう。第二タブローの短い前奏曲でさえ、全く異なった種類の音楽の方向性を目指し、歯切れのいい曲になるだろう、いやそうする必要はある…

2000年3月1日

朝の5時、屋敷のまわりは音を立てて風が吹き荒れている。いっこうにやむ気配もない。暗闇の中で、私は自分の感情をまったく表に出さない。昨日、短いスコアを書き始めた。そろそろ、最初のタブローだけでなく作品全体のスタイルを確立する必要がある。なぜなら、おそらくすべては基本素材が発点になるだろうから。最初のタブローの終結部の曲はまだ完成させていない。なぜ

なら、こここの場面自体がどのように展開していくか、終結部、間奏部、前奏部でどのように変化するかをまず見てみたいから。駿足のラクダで駆け抜ける楽しい場面もあるし…次の土曜くらいに新月を迎えたら書き始められるかもしれぬ。2番目のタブローは、喜劇仕立てである必要がある。カジムの邪悪な兄たちは、実はどちらかというと道化役にすぎないのだから。

2000年3月12日 日曜日

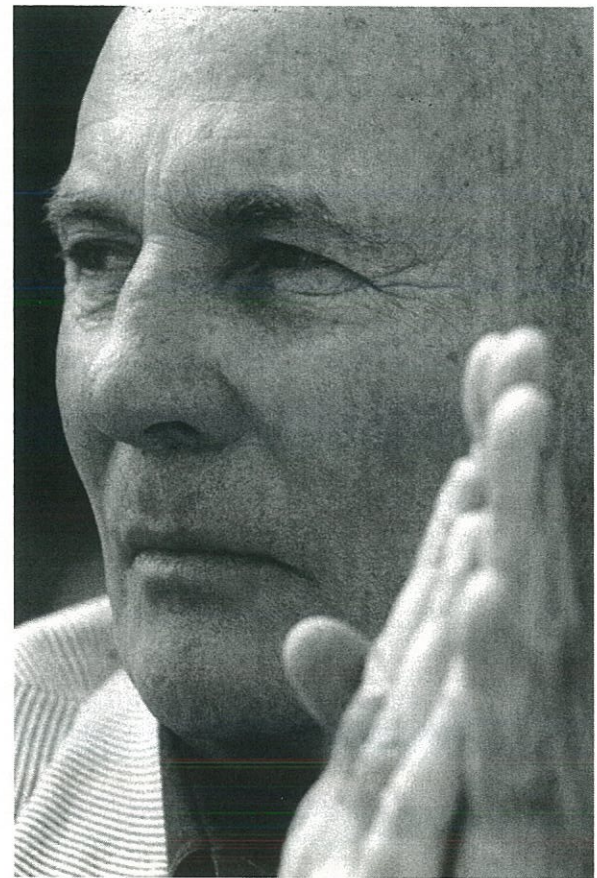
…ここ2~3日、ローマの友人や隣人たちに今回の台本の話をした。特に、今回のストーリーが人としての彼らにどう受け入れられるか、あるいはどんな“印象を与える”かについて反応を確かめたかった。皆喜んでくれた! あるいは、みんな優しいから喜ぶ振りをしてくれたのかもしれないが、悪くない気分だ。ヴィラ・ボルゲーゼでルーカス・クラナハ(父)(1531年)作の、大仰な帽子だけを身に付けた魅力的なヴィーナスの絵に再び遭遇した。傍らに立つ蜂の巣を抱えた天使は、ヴィーナスのひざ裏にも届かぬほど小さい。

読書:スタンダールの『ロッシーニ』、アイザイア・バーリンの『理念の力』、ステファン・ウォルシュのストランピンスキーに関する新しい本。それに、フォスコロの『墳墓』。(この長詩には、夜になると頭蓋骨から逃げ出してひどい鳴き声をあげる死の使いとしてのウプバが登場する。「たとえ危険であろうとも、私の仕事はすばらしい」と、ツェラーのオペレッタ『小鳥売り』にも出てくる。)だが、詩人のフォスコロは神秘性にこだわったが故に『墳墓』では間違いを犯している。なぜなら、実際のウプバは夜は眠るので鳴くことはないからだ。(日中でもあまり鳴くことはなく、「朝もやの中で、繊細で、恥ずかしげに、パステル色の鳴き声をユニゾンでさえするだけだ」。フォスコロは我らが魔法の鳥、ウプバとふくろうの一種のモリフクロウを取り違えているように思える。ネズミ狩りが得意なモリフクロウは追いかけられたり捕獲されたりすることはないし、東部ヴェストファーレンの納屋の扉に釘付けにされることもまずないのだ。ただ、確かに時々真暗闇の中で鋭い鳴き声をあげることはある。それはきっと良いこと——おそらく愛——を意味する鳴き声ではないかと思うが、違うだろうか?)

いまだに第一タブローの短いスコアを作曲している。まだ半分もできていない。毎日が飛ぶように過ぎていく。遅々として筆が進め私に、ファウスト・モローニ(秘書)が猶予と許容を示してくれるのが慰めだ。既に手元にある過去何十年の間の膨大な全作品を参考にしてみたが、大して助けにならない。

2000年4月5日 新月

第一タブローの短いスコアが完成した。昨日、これまで書いたものをすべてベーター・ルジツカ(ザルツブルク音楽祭芸術監督)に見せて説明した。彼は喜んでくれたようで、頬を赤くしていた。9つのタブロー、9つの場面。それらすべてが、10分より長くなってはならない——できれば短いほうがいい。そうすれば作品全体が1時間半以内に収まって、休憩なしで一気に上演できるだろう。



©Schott Music

マリーノ、2000年4月19日

2番目のタブローの前半の曲が大体できた。ここでは数多くのシュプレヒゲザングがあるので、カンタービレの要素はあまりすぐには使えない。ガリブはカウンターテナーに変更し、アジブは今ハイ・シュピールテナー(ブッフオ)になっている。二人をできるだけ醜悪にしたいからだ。もう少し後になったら、アジブをカウンターテナー(アルトの声域で)にして、ガリブはバスン・ブッフオにするつもりだ。オーケストラ編成には、中国の打楽器がたくさん入っている。第一場の時間を計ってみると、20分以上もあったので、削る努力をしなければならない。今の台本は台詞が多すぎて、必要な音楽が多くなりすぎる。ラクダに乗るシーンはなくす。つまりラクダは登場もしないし、それを表す音楽もない。大編成のオーケストラの間奏曲でラクダのシーンを表現する時間はない。劇場での古い塔から大門への転換は、一瞬のうちにほんの限られた空間で行われる。ラクダ移動のために作った曲の要素は、二人の邪悪な兄たちがカードゲームに興じる場面に使うつもりだ(既に書いた部分のみということ)。この場面を書き終えたら、転換用の短い曲を書かねばならない。この転換で、私たちはデーモンがカジムを待ち受ける禿山へといざなわれる...

マリーノ、2000年5月3日

曲作りがほとんど進んでいない。雨が降っていて、冷たい東の風が吹き荒れている。老人は、雨にぬれた遠くの地面をじっと見つめている。そこにあるバラは2~3日咲いただけで既に枯れかけている。3月27日にはもう到来の知らせを聞いたのに、まだ来ぬウプバのつがいをあてもなく待っている。鳴き声もきこえない。春か夏の終わりに鳴くのか。あるいは私の耳が遠くなって、物理的な原因で聞こえなくなってしまったのか?

マリーノ、2000年5月22日 ひどく寒い雨

...2日ほど前、ヤツガシラが非常に大きな声で鳴いた。はじめは私に気がついていないようだった。ヤツガシラが朝の音楽を奏でるのを見ようとしたが、私がほんの少し動いただけで、鳴くのをやめて、まるでオペラの歌姫のように気を悪くした様子で飛んでいってしまった。パニックすることも急ぐ様子もなく、ただ気分を害したように。一昨日、アジブとガリブはカードゲームに夢中になり始めた——カジムは既に帰ることのない旅に出発した後だ。デスクの前に座ったとたんに、曲が浮かんできた。まるで待合室でさんざん待たされた患者が、やっと診察に呼ばれたみたいだ。

2000年5月30日、木曜日

結果、この場面のラフな曲ができた。幸運なことに、仕事に対する喜びが少し増してきた。言いようのない満足感を感じたのは、私自身が仕事に直接鼓舞されて、幾つかのサウンドが生まれたことだ。まるで何か歌のようなものがいつも聞こえてくるといった感じだった。オーケストラ・ピットや舞台上での演奏を超越した歌声のようなものだ。何分間も続くひとつのエコー、あるいは遠い昔に消滅してしまったエコー、あるいは名状しがたい無意識の底のものはやなんと呼んでいいかも分らぬような遠い場所からのエコーが聞こえるような気がする。そんな潜在意識の存在をごく身近に感じるのだ。実際、この上音の響きに満ちた世界には、何か不思議なものがうごめいている。おそらくそれは、上位の概念で理屈抜きのハーモニーのようなものだろう。自分がそれについてもっと知りたいのか、とりあえずそのままにそっとしておきたいのかは分らないのだが。

ロンドン、2000年7月6日

おととい、2番目のタブローの結末の短いスコアを細部まで書き終わった。内容に変更と追加を数多く加えた。最後は二人の兄が、自分たちを包む夜に対する恐怖感に圧倒されて、気が触れたように踊り狂う。そして二人は冒険を取りやめることにして、その代わり快適なベースキャンプのような場所を設営して、そこでカードゲームに興じながらビールを飲むのだ。この頃までには、あるいはもっと前でも、アジブとガリブはまったく信頼できない薄っぺらな愚か者であることがはっきりする...それでも、二人の話をまとめるためにも2番目のタブロー全体を彼らのシーンに費やした(そうするしかなかった)。二人は父親の愛あるいは親の愛を知らないし、信頼もできなければ誠実でもないことが分っている。二人はいわば映画に登場する自堕落で愚かなキャラクターみたいなものだが、もっと危険——ブラックコメディに出てくるような——悪い道化役。といっても、ストラットフォードやフォーリングボステルやホイヤースヴェルダにいるような単純な悪党である。しばらくは二人のせいで苦勞を強いられるカジムとバディアトだが、オペラの最後に二人の兄に対する罰を企む際には本領を発揮する。その罰とは、誰もが嫌がる汚い仕事を一生続けるという、死刑より辛い終身刑である。

2番目のタブローに戻ろう。二人の色男(兄)は毛布にくるまって眠りにおちている。やった! やっと次に進める。3番目のタブローのさわりを書かねばならない。デーモンは既に高い山の上に座っている。長い髪の毛が邪魔になってデーモンは前が良く見えない。後にカジムがその髪を散髪してやることになる。ここではカジムとデーモンという二人の登場人物に何か彼等らしい象徴的なものを与える必要がある。2番目のタブローで既にカジムの基本的な特徴の幾つかは際立たせたが、いま重要な問題はデーモンの音楽だ。デーモンは実は天使で、だからこそ父性愛のようなものに何らかの形で属している。その音楽がまだ考えつかない。すぐそこに閃きのような光は感じるのだが、デーモン(誰しもそうだが)にも善良な面があるので、それに執着する。だが、それをどう音楽にするのだ? そんな得体の知れない、言葉にできないものを本当に音楽の中に見つけられるのだろうか? 何とか探し出して、見つけなければならない。そして、デーモン役の洗練されたエレガントな若きテノール、ジョン・マーク・アインスレーとデーモンの特徴(天使で空を飛び)が折り合えるヴォーカル・スタイルを見つける必要がある。カジムは我らがヒーローである。彼は全てに関して正しい行いをし、恐れを知らず、心も魂も豊かだ。幸運のスピリット(3人の少年)が彼の旅に同行するが、それらはモーツァルトのオペラのように目には見えない。だが、私はカジムに夢中だから、もしかしたら間接的には存在を示す音を聞かせることになるかもしれぬ。だから、3番目のタブローの前奏曲を書き始める必要がある。始まりは大きな音で身の毛のよだつ感じにせねばならないが、心の奥底にあるルーツの複雑なシステムにつながる深みのある心象風景も必要だ。この心の深みから、再び立ち上がり、いくつかの段階を経て、禿山(あるいは草だけが生えている)にまで登りつめる必要がある。禿山では、カジムのデーモンが3日間も湿った冷たい地面に陣取っている(彼が後に鼻をすするといわせるのはこのせい)。風が音を立てて吹き荒れるその場所で、カジムを守ることを自らの使命とするデーモンがカジムを待ち受けている。

ニューヨーク、2001年2月23日

...大西洋の風。ゆっくりとねずみ色の夜が明ける。私のウプバは遠く離れたセネガルがザンジバルにいるのだろうか。イタリアの早春に家路に着く時をかの地で待っているのか。故に、来週にはウプバのための哀歌を作る必要があると感じた。たぶん木管楽器のコンチェルトを伴う歌になるだろう。この歌はオペラの中で夜明け前の薄明かりのシーンで聞こえることになるだろうが、

美しいウプバが待ち望む夜明けが訪れようとも、それを告げることはない。我々にできるのは、思いをめぐらし、推理し、推測することだけだ…

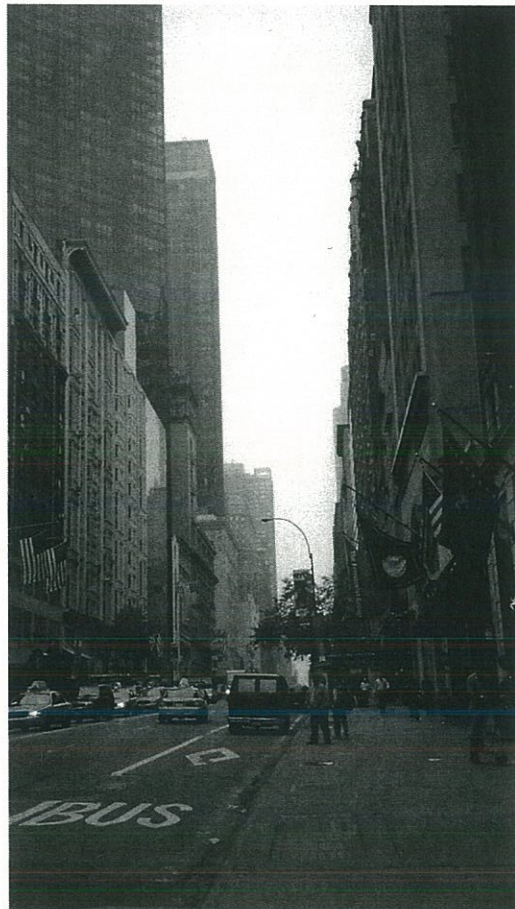
2001年5月上旬

…オペラのこれからの場面の作業をするのが楽しみになってきた。マリノーでの夏も楽しみだ。最近、仕事の中では既にしょっちゅうウプバの鳴き声を耳にしているが、現実には一組のつがい飛び立つのを目にしただけだ。そのうち2回ほどは、羽ばたき音が聞こえたのだが、そのとても大きなバサバサという音は、まるで東洋の高級娼婦が扇子をあおぐ音のようだ。このバサバサという耳に残る音やそれがかもし出す雰囲気こそ、このオペラの始まりだ。おそらく、私にはそのわけが分っていた。たぶんあの時のほうが今よりずっと良くその理由を知っていたのだ。

2001年12月2日

…今回のオペラは大枠でどんな感じになっているのだろうか？

旅することに飽きてしまったデーモンと極端に冒険好きなカジムの間に摩擦が生じる。それは心の中の内面的な衝突だけではない。私は漫画的あるいは笑えるエピソードで締めくくろうと考えていたのだが、一つの幕の結末として本当に相応しい形というより、もっと威厳と重厚さ(そしてもっと深い意味)を取り入れる必要がでてきた。そしてこの幕の結末はそうなった。分りやすくするために台本に少し加筆した。寒さに凍える花々が枝の先で枯れて朽ちていくように、今年もいよいよ終わろうとしている。毎日庭師のアントニオが湿った麦藁を燃やしている。その煙が朝もやに混じり合う。夜、猫たちを外に出す際に、ほんの束の間並んで佇んでいると、頭上からまっすぐに降り注ぐ月の光のその輝きに驚いてしまう。ピロードのような暗闇でひととき目立つ大きな星たちが深い光を放っている。音楽は私を置き去りにし、私も音楽から離れてしまった。マンハッタンは、9月11日の惨劇に見舞われた…



マリノー、2002年4月4日

…2~3日前のある朝、屋敷の表に向かって歩いていると、トランペットの音色にも似たウプバの大きな鳴き声がすぐそばではっきりと聞こえた。少し元気づけられた私は、暴君ディジャブのコンチェルタンテ部の曲作りをした。ディジャブが、アル・カジムとバディアトに魔法の箱(中身は不明)をなんとか手に入れて欲しいと語るくだりの曲だ。6番目のタブローの結末の最後を表現するこのコンチェルタンテ部は、4つか5つ

の異なる個別の楽節で成り立っている。これらを基本素材にして、後で、ずっと後になって、例えば10番目のタブローあたりで、追放と罰(うそつきはご用心!)を表現する好色で野蛮で忌まわしい踊りのための曲ができればいいかと考えている。カジムの兄である卑劣なアジブとガリブが当然の報いを受けるのだ。マリノーに戻ってきて以来、仕事は順調に進んでいる。——ロンドンでは、色々な邪魔が入った。あの気の滅入るような天候はとりわけそうだった。毎朝、朝の光が差し込む時間まで仕事をし、新鮮で瑞々しい何かを期待する…

6番目のタブローの結末は、私の手を借りずともおのずと形になってきたので、好奇心いっぱいの第三者の立場になって、成り行きを見守ることにする。非常に喜ばしい形で物事が流れていく気楽さをありがたいと思う(誰に対して?)。こういったことはそうしょっちゅう起きることではない——本当にごめんだ。しかし、鉛筆が速やかに(自動的に?)進んでいる時に、悲観的になってそれを止めようとする者などいるものか。

今日、2002年4月6日、認めざるを得ないのは結果がそれほど素晴らしい出来ではなかったことだ。線を引いて消したり、一部を削除したり、全体的に書き直したり、音符一つ一つを吟味し直して、元々の(組曲のような)意図が再び輝きを取り戻してくれるような何か別のものを生み出さねばならなかった…

マリノー、2002年11月29日、午前6時44分

アル・カジムとデーモン

昔このオペラの構想を練っていた頃、シリアの親戚——具体的には(古)カトリック教信者の義理の兄弟——に、電話で彼や港町アレppoの住民にとって悪魔とはどんな人間か、どう捉えているのか、またどんな姿をしているかと思っているのかと尋ねたことがある。すると、それ以上質問する必要もなく、すぐに明確な答えが返ってきた。それは天使であると!

この答えを聞いて、すべての扉が開かれ、直ちにこのデーモン役の声域とその音色の最初のヒントをつかむことができた。もっとも、その音域を探り、創案し、作り出していく課題はあったのだが、“叙情的な”ハイテノールの美しい役のための曲が書ける状況になったことは、全体的なコンセプトのためにも本質的な重要性をもつ。そして、ヘルデンバリトンのアル・カジムと彼の自我の一部であるデーモン(ハイテノール)の音楽的関係を以前よりずっと自信を持って大胆に想像できるようになった。

結局、デーモンがどこから(どの方角から)来たのかは、あまりはっきりとはしない。3番目のタブローの最初の行動(デーモンは歌うというよりしゃべる)を見れば、デーモンが自分より高みにある支配者(特に誰とは語られてない)の命令に従っていることは明らかだ。読者も聴き手も自分なりに思い描く以上のことをしてもいいだろうし、すべきでもあろう。一つかまた別の出発点あるいは判断基準を選んだ上で、自分の好みに合わせてストーリー全体(内容)を解釈することができるし、またそうすべきなのだ。

英訳: スティーブン・リンドバーグ
和訳: 三宅陽子